

「わかる」「できる」を実感する算数科学習をめざして
～「個別最適な学び」「協働的な学び」を生かした授業を通して～

いちき串木野市立旭小学校

1 研究のねらい

児童の実態や教職員・保護者の願い、時代の変化、学習指導要領等から、「間違いを恐れず試行錯誤し、最後まであきらめない子どもの育成」、「学習の見通しをもち、筋道を立てて考察する子どもの育成」、「相手に分かりやすく自分の考えを説明できる子どもの育成」をめざすため、本研究主題を設定した。

2 研究の概要

本研究では、三つのめざす子ども像を実現するために二つの仮説を立てて検証していくこととした。

〔仮説1〕 系統を意識した効果的な指導方法や学習指導の工夫を継続すれば、児童が「わかる」「できる」を実感することができるのではないか。

〔仮説2〕 児童に自ら学ぶ方法を学習させ、成就感を得させるために必要な環境を整えることができれば、児童が「わかる」「できる」を実感することができるのではないか。

3 研究の内容

仮説を検証し、研究主題に迫るために、次のような視点を設定し、研究を進めていくこととした。

〈視点1〉 学習指導の在り方について

- ア 単元の系統を視野に入れた児童の実態把握 イ 思考の可視化
- ウ 1単位時間の指導過程の工夫

〈視点2〉 協働的な学びの在り方について

- ア 練り上げの場の設定 イ 思考を深めさせる言葉の活用
- ウ 学習の見通しのもとせ方 エ 構造的な板書

〈視点3〉 学習環境の在り方について

- ア 「わからない」を言える学級（環境）づくり
- イ 間接指導におけるガイド学習の在り方
- ウ 主体的・対話的な学習を意識した授業の構成

4 研究の実際

(1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」に注目した研究実践の焦点化

「個別最適な学び」と「協働的な学び」に注目して焦点化を図り、実践を行った。また、「個別最適な学び」については、児童一人一人の実態に応じた指導の充実を図る「指導の個別化」、児童が最適な学習方法を調整できるような「学習の個性化」に整理して取り組んだ。

さらに、「みらいの学び推進事業」と連携し、ICTの活用を通して、「個別最適な学び」・「協働的な学び」の充実に取り組んだ。

(2) 「わかる」・「できる」へつなげる学習過程

児童が課題解決の中で、わからない・わかったを繰り返していくことで、「問題場面・前時との違い・何を聞かれているのか」が分かり、情報による判断・判別・分類を行っていく中で解決の糸口が判り、問題が解明できた・理解できたと解り、できたと実感したことが自信へと変わっ

ていくと考えた。そして、その考えをもとに「わかる」・「できる」へとつなぐために、1単位時間の学習過程を明確にした。



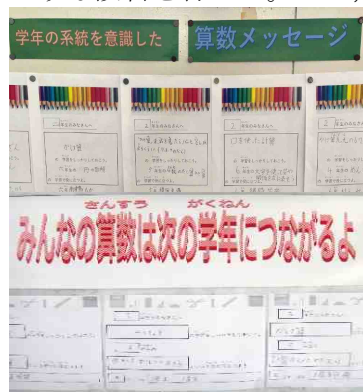
(3) 協働的な学びの場「なんで？だってタイム」の設定

協働的な学びを充実させるために、本校では学習過程に「なんで？だってタイム」を位置づけた。「なんで？だってタイム」とは、練り合いの場において互いの考えを交流したり、「なんで？」と思うような疑問点を友達の「だって…」という説明で解決したりすることにより、学びを深める活動である。



(4) 児童が自ら学び成就感を得るための環境設定

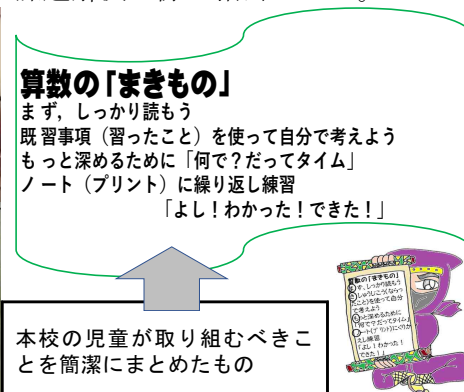
児童が自ら学び、成就感を得られるように、系統を意識したり学習の足跡をたどったりできるような設営を行った。また、算数の「まきもの」を作成し、課題解決の際の指針とした。



[系統を意識付ける設営]



[学習の足跡]



[算数の「まきもの」]

5 研究のまとめ

(1) 成果

- 授業中に「なんで？だってタイム」を位置付けたことにより、協働的な学びから個別最適な学びへと繋げることができた。
- ICTを効果的に用いることにより、個別最適な学びや協働的な学びを充実させるための工夫の幅を広げることができた。
- 児童の実態把握に努め、一人ひとりの「わからない」を大切にすることで、「わかる」と「できる」を意識した授業実践を行うことができた。

(2) 課題

- より効果的なタブレットの活用法やノート指導とのバランスはどうあるべきか、授業実践を通して検証していく必要がある。
- 粘り強く探究する意欲を育てるためにはどのような手立てが必要か、授業実践を通して検証していく必要がある。

6 今後の取組

ICT機器の効果的な活用方法やノート指導とタブレット活用とのバランスについて、授業実践を通して研修を深めていきたい。また、題材の工夫や学習形態の工夫、ユニバーサルデザインを意識した授業の在り方等を研修していくことにより、児童がより主体的に学びに関わり、解決しようとする態度を育成していきたい。